

早稲田大学大学院日本語教育研究科

博士學位申請論文概要

論 文 題 目

留学生のキャリア形成を支援する
大学日本語教育の役割

—キャリア形成プロセスの言語化を通じて—

申 請 者

山本 晋也

2020年 7月

1. 本研究の目的

本研究は、大学留学を経て卒業後に日本での就職を実現した私費外国人学部留学生(以下、留学生)のキャリア形成に焦点を当て、大学で日本語教育を担当する筆者が留学生のキャリア形成支援に携わることの教育的意味を探求した実践研究である。

本研究では、留学から卒業を経て社会人となる数年間の時間軸における、個人の自己のあり方に関する主体的な意識形成の過程を「留学生のキャリア形成プロセス」として捉える。そして、上記期間内の個人の意識形成に影響を与えた経験や変容、その背景にある社会的要素を、何らかの研究的・教育的手法を用いて他者に向けてのことばとして表現する行為を「キャリア形成プロセスの言語化」と定義する。本研究の目的は、調査・分析を通じて、キャリア形成プロセスの言語化を行うことの研究的・教育的な意義を明らかにすることである。そして、留学生のキャリア形成支援に対する大学日本語教育¹の役割として、大学を含む社会の中に、キャリア形成プロセスの言語化を行うための場づくりが必要であることを主張するものである。

2. 本研究の構成

本研究は、「序論」「先行研究」「調査・分析」「実践」「結論」の5部、全9章から構成されている。第1章が「序論」、第2章・第3章が「先行研究」、第4章、第5章、第6章が「調査・分析」、第7章が「実践」、そして、第8章・第9章が「結論」に相当する(表1)。以下、各章の概要について述べる。

表1 本研究の構成

カテゴリ	章題	副題
序論	第1章 序論	留学生のキャリア形成支援をめぐる大学日本語教育の課題
先行研究	第2章 先行研究①	留学生政策の変遷にみるキャリア形成支援の課題
	第3章 先行研究②	キャリア概念の理解とその内実の解明に向けての研究アプローチ
調査 分析	第4章 調査概要	キャリア形成プロセスの言語化への2つのアプローチ
	第5章 分析①	TEAを用いた留学生のキャリア形成プロセスの言語化
	第6章 分析②	キャリア・トランジションモデルによる留学生のキャリア形成プロセスの言語化
実践	第7章 実践	キャリア形成を支援する大学日本語教育の実践から
結論	第8章 総合考察	本研究のまとめと調査課題への回答
	第9章 結論	留学生の多様なキャリアを語る場を社会の中へ

¹ 「大学日本語教育」とは、上述した筆者の立ち位置を示す造語であり、大学で日本語教育を担当する教員、または、大学で行われる日本語教育実践、を指して用いられている。

3. 各章の概要

3.1 第1章 留学生のキャリア形成支援をめぐる大学日本語教育の課題

第1章では、本研究の調査フィールドである地方小規模私立大学(X大学)の留学生の事例を踏まえ、準備主義的なキャリア観・言語教育観によって構成された日本社会の社会的現実と、留学生の多様なキャリア認識との乖離を指摘した。準備主義的なキャリア観・言語教育観とは、客体化された日本語や日本(企業)文化の獲得によって、自己を日本社会に適応させていこうとする教育の発想を指す。本研究では、その要因を日本のキャリア教育をめぐる議論から論じた。

キャリア教育とは、個人の「キャリア発達」を促す教育である。キャリア発達については、「社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していく過程」と定義されている(中央教育審議会(答申), 2011)。よって、日本語教育が行うべきキャリア教育とは、個人が社会とどう関わっているのかをことばとして表現することで、自分らしい生き方に対する主体的な意識の形成をめざすものであると考えられる。しかし、実際は留学生のキャリア形成支援を標榜した日本語教育実践の多くが、日本語・日本(企業)文化の獲得を通じての日本社会への適応をめざして行われており、そのことが、日本で学ぶ留学生の自分らしい生き方とのずれを生んでいるのではないかと考えられる。

そこで本研究では、以下3点の研究課題(RQ)の解決を通じて、大学で学ぶ留学生のキャリア形成支援に対する大学日本語教育の役割に新たな見方を提示することをめざした。

RQ1 「キャリア」をめぐる先行研究の様相と課題はどのようなものであり、それを踏まえて日本語教育においてどのような研究・実践が必要であるのか

RQ2 留学生のキャリア形成プロセスを構成する経験と変容、およびその背景にある社会的要素とは何か

RQ3 留学生のキャリア形成を支援する日本語教育からのアプローチは、いかに構想・実施されるのか、その結果としてどのような学びが育まれるのか

3.2 第2章 留学生政策の変遷にみるキャリア形成支援の課題

第2章では、日本の留学生政策の変遷と、大学・企業などにおける取り組みの事例から、留学生のキャリア形成に関する問題点を整理した。その目的は、日本の留学生受け入れをめぐる歴史の中に、留学生のキャリア形成、すなわち、彼(女)らが日本で生き、働くことがいかに位

置づけられてきたかを確認することにある。その結果、現在日本で期待される「高度人材」のキャリアモデルをめぐって、発案者である日本政府の狙いと、受け入れる企業や留学生の実態との間に深刻な乖離があることが分かった。そして、問題解決に向けて、1)留学生・企業双方の声がどのような社会的・文化的文脈から生じているのかを問う視点が必要であること、2)視点の構築に向けては、多様な人々との共生をめぐる「市民性教育」の視点が重要であり、そこに日本語教育の研究・実践が貢献する可能性があること、の2点に言及した。

3.3 第3章 キャリア概念の理解とその内実の解明に向けての研究アプローチ

第3章では、心理学におけるキャリア議論の系譜を辿り、キャリア概念の理解とともに、留学生のキャリア形成プロセスに対する研究アプローチの方法を探ることを目的とした。そこで、本研究では、「ライフテーマの発見」を個人のキャリア形成の命題としたサビカス(2015)のキャリア構築理論に注目した。サビカスは、個人のキャリアを「言語によって自己の一貫性(アイデンティティ)を形成し維持すること」と捉え、「できる限り人と話し、社会と向き合い、その中で目まぐるしく変わっていく自分と職業との位置関係をつかみ、自分と職業とを重ねあわせる作業」(下村 2015, p.17)が必要であると主張する。そこで、本研究では、キャリアを「人生における様々な社会的役割や経験の積み重ねによって生じる、個人の主観的な意識変容の過程」として捉え、質的な研究手法を用いてアプローチしていくことを述べた。

3.4 第4章 キャリア形成プロセスの言語化への2つのアプローチ

第4章では、本研究の調査概要と、分析手法についてまとめた。本研究の調査協力者は、X大学での留学生活を経て、日本国内企業に就職した私費留学生のサリー、カナエ、ユウキ、コウの4名(全て仮名)である。今回、この4名を調査対象者としたのは、1)日本での就職実績数の上位である東アジア地域出身の学生であること、2)いわゆる「高度人材」モデルとは異なり、私費留学を経て中小企業や地場産業への就職というルートを辿っていること、の2点が挙げられる。本研究では、インタビューにおける4名の語りの音声記録を1次データとし、さらに、1次データに基づき作成された文字化資料を2次データとして分析を行った。

分析に際しては、先行研究章で明らかになったキャリアへのアプローチから、キャリア形成プロセスを構成する「時間」と「経験」の言語化に注目した。そして、そのための手法として、文化心理学におけるプロセス研究の手法である「複線径路等至性アプローチ(Trajectory

Equifinality Approach :TEA)」(安田・サトウ, 2012)の理念を参照した。具体的な記述の手順としては、1)インタビュー記録の文字化スクリプト作成、2)文字化スクリプトに基づく TEM²図の作成、3)作成した TEM 図に基づく再インタビューと内容の確認、4)TEM 図の修正、5)修正後の TEM 図の確認、という 5 段階を経た。その後、続く 5 章にて、修正した TEM 図を基に、4 名のキャリア形成プロセスについて分析・考察を行った。

3.5 第 5 章 TEA を用いた留学生のキャリア形成プロセスの言語化

第 5 章では、1)留学生のキャリア形成プロセスを構成する経験や変容の意味、2)経験や変容の背景にある社会的要素(社会的な後押しや妨げの力)を探るべく、TEM 図に現れた経験や選択の分岐点、分岐点に影響を与えた社会的要素を抜粋し、一覧にまとめた。特に、2)の経験や変容の背景にある社会的要素については、4 名それぞれのデータにみられた要素を抜粋し、類似した概念をまとめてカテゴリ化した。そして、カテゴリ同士の関係性を踏まえて、複数の上位カテゴリを作成した。

分析の結果、4 名の留学生のキャリア形成プロセスを構成する経験や変容として、大学内外の多様な人やコミュニティとの日本語を介した相互行為³の経験を通じて、日本語や日本語を使う人々との関係性、および、自己アイデンティティに変容が生じていることが明らかになった。また、それら認識の変容が、留学生個人の全人的な成長を支え、留学生活を通じた学びの実感へとつながっていることも明らかになった。そして、TEM を用いた図式化の結果、上記の経験や変容には、「人間関係の支え」「制度・環境による補助」「成長の実感」「土地・コミュニティへの愛着」の 4 要素からなる社会的な後押しの力と、「日本語の困難」「制度・環境の影響」「人間関係の問題」の 3 要素からなる社会的な妨げの力がせめぎ合いとして働いていることが明らかになった。

以上を踏まえて、第 5 章の分析から得られた留学生のキャリア形成支援に対する実践への示唆として、大学日本語教育の実践においては 1)大学内外の多様な人やコミュニティとの相互行為を支えることばの学びをめざすこと、2)相互行為を支える人間関係の構築や、制度・環境の改善へと働きかけていくことの 2 点が求められることを述べた。

² TEA の理念の一つである「複線径路等至性モデリング(Trajectory Equifinality Modeling)」(安田・サトウ 2012)の頭文字をとったもの。ある事象に至るまでの経験や認識のプロセスを図式化する行為であり、作成された図を TEM 図と呼ぶ。

³ ここでの「相互行為」は、X 大学の日本語クラスや、アルバイト、クラブなど留学生の関わるコミュニティにおける、自身の位置づけや具体的な仕事をめぐるコミュニティメンバーとの交渉や試行錯誤を指す。

3.6 第6章 キャリア・トランジションモデルによる留学生のキャリア形成プロセスの言語化

第6章の目的は、トランジション⁴の観点から大学卒業後のキャリア形成プロセスを言語化するとともに、第5章の分析結果を相対化し、より深い理解をめざすことにあった。そこで、第5章の調査協力者4名に対し、大学卒業後に社会人として働き始めてからのフォローアップインタビューを実施した。そして、インタビューの結果をブリッジズ(2014)の「キャリア・トランジションモデル」の理論枠組みを援用して分析し、大学時代のキャリア・トランジションと、社会人となってからのキャリア・トランジションの2点のプロセスを提示した。その結果、1)大学時代・社会人時代に経験したトランジション(移行・節目・転機)は、その時期区分においてあるべき自分の探求、つまり、自己アイデンティティの探求と形成の過程と重なること、そして、2)学生時代のキャリア形成プロセスの言語化の経験が、卒業後のキャリア形成の土台となっていること、の2点が明らかになった。しかし一方で、環境の変化や時間的余裕のなさや人間関係の希薄さなどの要素が妨げとなり、社会人としてのアイデンティティ形成に問題が生じていることも同時に示された。以上の結果を踏まえて、大学時代の自己の役割やあり方をめぐる他者との対話の経験が、社会人としてのキャリア形成の土台となることを述べ、長期的なキャリア形成を視野に入れた支援の必要性に言及した。

3.7 第7章 キャリア形成プロセスの言語化を行う大学日本語教育の実践から

第7章では、これまでの本研究の成果を踏まえて、X大学にて筆者の実施した留学生のキャリア形成支援を主眼とした「日本語表現法Ⅱ」の実践を取り上げ、その教育的意味を明らかにすることを目標とした。「日本語表現法Ⅱ」は、X大学の留学生カリキュラム改編の過程で、「日本社会という異文化の中で、周囲の人々との関係性を構築し、将来的なキャリア形成を促すための日本語能力とは何か」(山本・立部 2016, p.45)を考えた末に構想されたものである。実践では、1)留学生生活を支えるテーマの発見、2)テーマに関する意見や経験の言語化、3)一連のプロセスを分かち合う参加者間の対話活動の3点を授業の指針として、3つのテーマに対するレポート作成とディスカッションを行い、最後に、自身の印象に残った1つのテーマを選択して最終レポートを作成することを活動の軸とした。実践の詳細は、以下(表2)のとおりである。

表 2 2019 年度「日本語表現法Ⅱ」の授業スケジュール

カテゴリ	日程とテーマ	教室活動の主な内容
導入	第 1～2 週 【自己紹介】	1 週目：授業ガイダンス・自己紹介文の作成 2 週目：自己紹介文の発表
テーマ活動	第 3～5 週 【大学って何をすると ころ？】	3 週目：課題文の理解とその共有 4 週目：課題文を基に大学生活について考える 5 週目：内容のまとめと小レポート作成
	第 6～8 週 【過去・現在・未来 を描く】	6 週目：過去～現在の経験を振り返る 7 週目：過去～現在に至るストーリーマップの作成 8 週目：現在～未来に至るストーリーマップの作成
	第 9～11 週 【働き方を考える】	9 週目：日本的・欧米的な労働観を考える 10 週目：ワーク・ライフ・バランスについて 11 週目：就職・キャリア・生き方をつなぐ
まとめ	第 12～15 週 【最終レポート】	12 週目：テーマの決定と表記 13 週目：構成と読みやすさ 14 週目：レポート検討会の実施 15 週目：レポート検討会の続き

分析では、実践に参加した留学生のロイ、シュウ(全て、仮名)の 2 名が作成したレポート記述の内容の変遷やディスカッションの様子から、彼らの学びの実感と、本実践の教育的意味について考察した。考察では、ロイ(仮名)が自身のキャリアをめぐる振り返りを行う中で、過去の経験に新たな意味づけを行い、将来に続く自身の生き方を見いだしていく様子が見られた。また、同じく留学生のシュウ(仮名)は、大学での学びの意味を問い直すレポートの中で「留学」に対する自身のイメージと現実のギャップに気づき、悩みながらも教師やクラスメイトとのやり取りを経てレポートを更新していく中で、新たな留學生活の目標を見いだしていった。2 人の事例は、自身の過去の経験や現状の認識をことばにしてレポートなどの形で表現し、他者とのディスカッションに持ち込むことで、経験や認識に対峙する自己への理解が深まり、自己のあり方をテーマとする「自己内対話」(梶田 1987)が発生していたことを示すものであった。

3.8. 第 8 章 総合考察

各章の概要を踏まえて、第 8 章では 3 点の調査課題への回答を示し、本研究の結論を述べた。

◆ RQ1 への回答

RQ1 「キャリア」をめぐる先行研究の様相と課題はどのようなものであり、それを踏まえて、日本語教育においてどのような研究・実践が必要であるのか

⁴ 「トランジション(transition)」は、キャリア研究の分野で「移行」「節目」「転機」などと訳される(金井 2002)。個人の人生局面における内面の変化を理解するためのキーワードである。

先行研究の知見から、留学生のキャリア形成支援に携わる日本語教育の研究・実践の中心に能力や知識として客体化されたキャリアの獲得によって、日本語を学ぶ自己を日本社会に適応させていこうとする準備主義的なキャリア観・言語教育観があることが分かった。しかし、日本の大学で学ぶ留学生のキャリア形成の現実は、あくまで個人の主体的な選択の積み重ねから成るものであり、ことばや文化の理解に基づいて日本社会への参加と適応をめざすキャリア観・言語教育観は、多くの留学生のキャリア認識との乖離が指摘されている。また、準備主義的な発想に基づく研究や実践は、マジョリティとしての日本社会側からの同化や強制の圧力として作用し、排外的な言説の構築へとつながる恐れがある。

以上の内容を踏まえ、留学生のキャリア形成支援に対する日本語教育の研究・実践の構想においては、準備主義的なキャリア観・言語教育観の脱構築が必要であり、そのためには、キャリア発達の見点から、留学生がどのような社会的役割を経験しているのか、また、その役割を担うまでの過程で、自己のあり方に対してどのような葛藤や変容が生じていたのかを把握する必要がある。すなわち、「キャリア形成プロセスの言語化」を行う研究・実践が必要であるというのが、RQ1への回答である。

◆ RQ2 への回答

RQ2 留学生のキャリア形成プロセスを構成する経験と変容、および、その背景にある社会的要素とは何か

本研究の調査・分析を通じて見いだされた「留学生のキャリア形成プロセス」を構成する経験とは、大学内外の様々な人やコミュニティとの日本語を介した相互行為の経験であった。相互行為の経験を通じて、日本語や日本語を使う人々との関係性や、自己アイデンティティの形成・変容が生じており、個人の全人的な成長の実感へとつながっていることが示された。そして、人やコミュニティとの関係性や自己アイデンティティの形成は、留学生活における様々なキャリア・トランジション(移行・節目・転機)を乗り越える土台となっていた。

本研究の事例からは、いわゆる「留学生活」を構成する普遍的な経験の一つひとつに、個人のキャリア形成につながる学びが生じていたことが明らかになった。その論拠として、第5章のTEAを用いた分析においては、調査協力者である4名の留学生それぞれの「留学」や「就職」に至るまでの径路⁵の固有性・多様性が示された。この固有かつ多様なキャリア形成プロ

⁵ 多様な分岐の広がる分かれ道を想定して「径路」(安田・サトウ 2012)という表記を用いている。

セスに共通するのは、4名の調査協力者が抱えることばの課題や周囲との関係性の中で、留学生生活をより良いものにしていこうとする現実の捉え直しが起こり、主体的な選択と経験が積み重ねられていった点である。以上の選択や経験の背景には、3.5で述べた4つの社会的な後押し力と、3つの社会的な妨げの力が存在している。これらの社会的要素がせめぎ合う緊張関係において個々の経験や変容が生じており、留学生のキャリア形成プロセスを構成しているというのが、RQ2への回答である。

◆ RQ3への回答

RQ3 留学生のキャリア形成を支援する日本語教育からのアプローチは、いかに構想・実施されるのか、その結果としてどのような学びが育まれるのか

留学生のキャリア形成を支援する日本語教育実践においては、自己と社会との関わりをことばにして他者へと表現することで、周囲との関係性や制度・環境の中に埋め込まれた自己への気づきを促すことが重要であると考えられる。なぜなら、自己のあり方に対する主観的な意識形成の過程としてキャリアを捉えるうえで、自分自身のテーマについて思考する「自己内対話」(梶田 1987)の機会が重要であり、そのためのことばは、常に他者や社会との関係性において生じるものだからである。第7章では、留学生が個人のキャリア形成の中心にあるライフテーマを見いだしていく過程で、過去の振り返りや現状の問い直しを行い、キャリアを構成する経験に新たな意味づけを行っていることが分かった。そして、本質的な自身の生き方への気づきや、留学生活における新たな目標の設定という形で、キャリアをめぐる将来展望を主体的に切り開いていく様子が見いだされた。RQ3の回答として、キャリア形成プロセスの言語化を行う日本語教育実践の意義は、キャリア形成の主体である留学生が、自らのことばで主体的なキャリア形成を実現していくことを可能とする点にある。その際、実践者の抱く理想的な将来像やキャリアの方向性を前提とせず、また、過去の経験などの個人の深い部分に触れる可能性を考慮して、主体となる学生が安心して自己を語れる場を保証していく必要がある。

4. 結論と今後の課題

4.1 本研究の主張

本研究の主張は、長期的な留学生のキャリア・トランジションを支えるために、他者ととも
に自らのことばで自身のキャリアを語り、過去の経験や経験に対峙する自己に主体的・前向き

な意味づけを行う場を，大学日本語教育の責任として大学を含む社会の中に実現していくことである。その「場」とは，教室実践に限らず，例えば大学内の制度や環境，学生間や地域社会の人々との交流などにおいて実現されるものである。以下では，留学生が自らのことばでキャリアを語り，経験や自己の主体的な意味づけを行うための場づくりを大学日本語教育の役割に据えた本研究の主張に対して，1) なぜキャリアを語る場が必要なのか，2) 場づくりに向けて必要なことは何か，3) それは具体的にどのように実現できるのか，の3点について述べたい。

1)について，日本の大学への「留学」や卒業後の「就職」をめぐるキャリア形成のトランジション(移行・節目・転機)の局面は，自己のあり方への問い直しや主観的な意識変容が生じる重要な機会であると同時に，新たな人間関係や環境との関わりの中で，自己アイデンティティの葛藤や混乱が生じやすい時期でもある。それらの葛藤や混乱を乗り越えるために，日本語教育の実践において過去の経験の振り返りや現状の問い直しを行い，その理解をことばにして他者に表現すること，そして，個人のキャリアの中心にあるテーマへの気づきを促すことには，大きな意義があるといえる。しかし，特に大学日本語教育に携わる実践者が考えなければならないのは，**多くの留学生にとって，このような自身のキャリアを語る相手や場を見つけること自体が，実は一番の困難なのだ**ということである。

本研究の事例から，「留学」から「就職」に続く長期的なキャリア形成プロセスの過程で生じる留学生の退学や早期離職には，トランジションの局面におけるキャリアを語る相手や場との接続に問題があることが分かった。キャリア形成プロセスの言語化は，一度行えば安心というものではなく，「留学」「就職」といったトランジションを迎えるたびに，今現在の生き方と照らし合わせて行う継続的な営みである。だからこそ，そのためのことばのやり取りの場，つまり，他者とともに自らのことばでキャリアを語る場を，大学日本語教育の責任として大学を含む社会の中に保証していくべきであると本研究は考える。

2)については，客体化された日本語や日本(企業)文化の獲得によって，自己を日本社会に適応させていこうとする準備主義的なキャリア観・言語教育観の見直しが必要である。その理由は，こうした発想が多くの留学生が抱えるキャリアの課題や，青年期にある自己のあり方としてのアイデンティティ形成の問題を，個人の日本語能力や異文化適応の問題にすり替えてしまうからである。そして同時に，日本語能力や異文化適応に問題がない(ように見える)留学生は，すなわち，キャリア形成にも問題を抱えていないのだと判断され，支援の対象から外れてしまう恐れがあるからである。

第7章の調査協力者の一人である留学生のシュウは、「日本語能力が不十分だから人間関係構築が難しい」と語り、「日本語能力の向上」を今後の留學生活の課題として挙げていた。しかし、実は彼自身の日本語能力の問題ではなく、来日前に期待していたアイデンティティと、現在の自身の置かれた状況とのギャップが問題であるということが明らかになった。一方、シュウの悩みに対して、筆者は彼の日本語能力や生活状況から「人間関係には問題がない」と勝手な判断をし、適切な対応をすることができていなかった。こうした事例からもわかるように、準備主義的なキャリア観・言語教育観の問題は、留学生のみならず、大学の教職員、ひいては、日本社会全体に共有された強固な価値観である。この価値観の変容を、ひとつの日本語教育実践の中に見いだしていくことは難しい。留学生の多様なキャリアを語る場づくりに向けて必要なことは、長期的な人生におけるキャリア形成の過程において、キャリアをめぐる個人の価値観がいかに変容しているのか、その間にどのような経験があったのかを見ていくことである。そして、留学生のキャリアの語りをもとに対話を重ね、何が真に問題であるのかを共に見いだしていく姿勢が重要であるといえる。

最後に、3)については、相互行為を行うことばの教育実践のみならず、相互行為の背景にある「人間関係」や「制度・環境」の要素への働きかけがポイントになると考えられる。

前述のとおり、留学生のキャリア形成プロセスにおける経験や変容を支えるためには、ひとつの教育実践に注目するだけでなく、複数の教育実践や制度の総体として、その手立てを考える必要がある。その際には、キャリア形成プロセスの言語化によって、留学生の抱えることばや文化の背景にある課題を可視化し、協働的に解決すべき道筋を立て、解決に向けての手立てを様々な個人とともに探っていくことが求められるだろう。「大学日本語教育」がキャリアを語る場づくりを行うことは、ことばの教育の専門性にも関わる課題であるといえる。

4.2 本研究の意義と課題

本研究の独自性は、「キャリア形成プロセスの言語化」を手掛かりとして、大学日本語教育のあり方を論じた点にある。キャリアとは本来、個人と社会との関わりにおいて見いだされる主観的な発達のプロセスと深い関わりがあった。その意味で、個人のキャリア形成は、全ての教育という営みに共通してめざされるべき価値観である。そのことは日本語教育においても同様であるが、日本語教育を通じてのキャリア発達は十分に議論されてこなかった。そこで本研究では「キャリア形成プロセスの言語化」を核とする2つの研究アプローチを通じて、留学生

活における個人の経験や変容の中に、自己のあり方をめぐる主観的な意識形成の過程を捉えた。さらに、「キャリア形成プロセスの言語化」を教育実践に取り入れることで、主観的なキャリアの発達を支える日本語教育の実践のあり方を示した。以上を通じて導かれた大学日本語教育の役割として、留学生の長期的なキャリア発達を支えるために、留学生が他者とともに自らのことばでキャリアを語る場を、大学を含む社会に実現していくべきであるとする本研究の主張には、社会的に大きな意義があると考えられる。

TEA を用いた研究においては、1名の分析によって径路の深みを、4名の分析からは径路の多様性を見ることができ、そして、9名の分析によって径路の類型化が可能になるという(安田・サトウ 2012)。本研究ではキャリアの固有性・多様性に注目し、分析結果の提示に1名ごとのデータを用いて TEM 図を作成した。そのことで、留学生個人のキャリアの深みを記述することができたが、一方で、径路の多様性に関してはさらに研究を重ねていく必要がある。今後は同種の研究を行う研究者との連携も視野に入れつつ、調査フィールドの拡大と分析事例の積み重ねを繰り返すことで、より主張の妥当性を高める必要がある。

<参考文献>

梶田 叡一(1987)『自己認識・自己概念の教育』ミネルヴァ書房

金井 壽宏(2002)『働くひとのためのキャリア・デザイン』PHP 新書

サビカス, M, L(著), 日本キャリア開発研究センター(監訳)乙須敏紀(訳)(2015)『サビカス キャリアカウンセリング理論 - <自己構成>によるライフデザインアプローチ』福村図書

下村 英雄(2015)「コンストラクション系のキャリア理論の根底に流れる問題意識と思想」渡部 昌平編著 (2015)『社会構成主義キャリア・カウンセリングの理論と実践 - ナラティブ, 質的アセスメントの活用』福村出版, pp.10-43

中央教育審議会(2011)『今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申)』

https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2011/02/01/1301878_1_1.pdf(2020年6月20日)

ブリッジズ, M(著)・倉光修・小林哲郎(訳)(2014)『トランジション - 人生の転機を活かすために - 』, パンローリング

安田 裕子・サトウタツヤ(編著)(2012)『TEM でわかる人生の径路 - 質的研究の新展開』誠信書房

山本 晋也・立部 文崇(2016)「留学生カリキュラムの改編とその実践的意義」『徳山大学論叢』82, pp.43-58